

何でも読もう会

書物名	『イワン・デニーソヴィチの一日』 ソルジェニーツィン	開催 日時	2022.2.1	推薦	斉藤
巻・章	全編		Zoom	出席者	6名

1962年発表。作者のデビュー作。世界中にセンセーションをまき起こした。フルシチョフの2度にわたるスターリン批判（1956,1961）から間もなくして書かれた作品。閉ざされ、抑圧されたソ連の政治、文化、社会状況の中で、強制収容所に押し込められた人々の一日をリアルに描く。作者自身の体験でもある。

リアルでありながら感情の抑制が効いていて、淡々とした調子だ。強制労働の囚人たちに目が注がれるのは当然だが、作者は歩哨や護送兵たちの苦労にも目をむけ、観念に流されない。主人公イワンは10年の刑期が終えそうなのだが、先のことは分らない厳しい社会。出所できても郷里に帰れずシベリアやアジアに流刑になるかも知れない。それなら今の方がとの思いさえよぎる。

何ともやるせない話だが、その中でも楽しい一日だってあるし、楽しいひとときもあると、ある種の落ち着きと自由な気分（限られているが）を味わったりする。

極限に近い状況で束縛され、それでも生きていく人間とは——さまざまな議論、感想が交わされた。文中、スターリン批判もイデオロギー批判も正面切ってはなく、むしろ束縛の中のわずかな自由と人間関係の温もりが酷寒（マローズ）の中に浸みているとの意見が多かった。